
泣き空は君に微笑む

和をん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣き空は君に微笑む

【Nコード】

N7164D

【作者名】

和をん

【あらすじ】

—あんなに大きな空だって泣くのだから。どうか、君も、大きな声で泣いて。自分のために泣けなくなった少女とそれを見守る少年のお話。

プロローグ

あんなに大きな空だつて泣くのだから。
どうか、君も、大きな声で泣いて。

窓を透明な水が流れる。

雨のカーテンの向こうに見えるグラウンドは水を浴びて気持ちよさ
そうだ。

誰かが入っていったのか、ここからでもぬかるんだ土の上の足跡が
見える。

空は灰色の雲に覆われて、薄暗く地上を覆う。

「次、空見」

まっちゃんの声は低くて、すごく大人を感じさせる。

早く大人になりたい、大人になって、そうしたら全部、変わる気がするから。

「あれ、空見は？ ホームルームいたよな？」

まっちゃんが前の席に座る女子生徒に聞く。

まっちゃんは僕ら2年4組の担任兼国語の教師だ。

フレームのない眼鏡が、まっちゃんの年齢をわからなくさせる。

「保健室じゃないすかー？ ソラ気分悪いって言ってたし」

誰も、誰も気づかない。僕だけ。

（あそこだよ）

校庭の木の陰に隠れて。

水を浴びて気持ちよさそうに上を見上げてる。

視界が悪いうえに、この雨の中つつたっている生徒がいるなんて誰も
思いもしない。

ローファーはきつとどろどろだろう。

校則通りに黒くて長い髪の毛を二つに縛って、スカートは膝下2センチ。
ンチ。

ソラは優等生だ。雨の日以外。

くるりと彼女が振り向いた。

小さな手が雨の向こうで振られる。

（タオル。持って行ってやんなきゃ）

僕は、窓際の一番後ろの席が取れたことをこれ以上喜んだときはない
と思う。

「みなー。遅いよー」

グラウンドの近くにある体育倉庫。

僕は傘を閉じて、その中に入っていく。

彼女は上着をハンガーにかけていた。

しっとりと濡れたYシャツが彼女の体のラインを浮き彫りにする。

結んだ髪の毛の先からは、小さな雨が床に、ソラに、降りそそいでいた。

僕はちょっとそっぱを向きながら、彼女に肩掛けの紐がついているビニールのバッグを渡した。

女みたいなあだ名を嫌だと思ったことはない。

でも、僕は男だから。

「ふふ。みなはまだ慣れないね」

そのビニールバッグを受け取ると、彼女はよいしょと立ち上がった。

僕は後ろを向く。

衣擦れの音。

雨の音に混じってその音は僕を包み込むように優しく降り注ぐ。

「みな、いいよ」

振り向くとジャージに着替え終わったソラが立っていた。

中は体操着だ。

ほどいた髪の毛にタオルを被せている。

「どうやって、言い訳するの？」

僕が聞くと、ソラはいたずらっこのように片目をつぶって見せた。

「大丈夫。制服が苦しくなったっていうから。髪が渴くまではここ

にいるよ」

埃くさい体育倉庫は雨の匂いと混じって、なんだか変な匂いがする。暗くてかび臭くて切なくなるほど静かなこの空間に、ソラを一人にはしたくなかった。

「ほら、早く行かないと。授業始まっちゃうよ?」

ソラが笑う。

校舎から離れた独りぼっちの体育倉庫の中で、ソラは笑う。

僕は、ソラに近づくと、ぎゅっと抱きしめた。頭を抱えるようにしてタオルごと濡れた髪の毛を優しく優しくなでる。

ソラはつつたつたままだった。

それでいい。

だって僕らは、恋人同士じゃないのだから。

「皆川ー、どこ行ってたんだよ?」

前の席の森岡が振り向く。

次の授業まであと1分。ぎりぎりだった。

「ん、ちょっと、外にね」

「お前、ほんと雨好きだな」

「うん、そうだね」

笑ってみせる僕に、森岡は苦笑して前を向いた。
傘を差していったのにどうして制服が濡れているか、なんて聞かない森岡が、僕は好きだ。

「はい、授業始めるよー」

次の時間は英語。 なっちゃん先生が出席簿やら何やらを抱えながら教室に入ってきた。

「きりーっ」

ねえ、ソラ。

僕は立ちながら、体育倉庫を見つめた。

「れい」

いつになったら、君の。

「ちやくせき」

君の雨が見られるんだろうね。

僕と彼女の小雨のような秘密 1

2年のこのクラスになって、半年経つまで、僕はソラのことを「空見さん」と呼んでいた。

空見かある薫。同じクラスの女の子。優等生。

僕の頭の中に入っていた、ソラデータはこれだけだった。これだけで十分だった。

僕は彼女が、「空見くん」ではなく「空見さん」である、ということがわかっていれば大抵のことは困らなかったからだ。

優等生、というのも僕が半年で得た主観的な付加事項にすぎない。

僕が「空見さん」から「ソラ」に呼び名が変わるには、ほんの一日あればよかった。

雨の降る日で、放課後に教室の掃除当番があつて、なおかつゴミ出しじゃんけんに負けていれば、僕はいつでも「空見さん」から「ソラ」と呼べるようになったんじゃないかと思う。

でも、それでも、やっぱりあの日がなかったら、例えば、僕が校庭に佇む彼女を見つめたり、濡れた彼女にタオルや着替えを持っていたり、ましてや彼女が僕を「みな」と呼ぶこともなかったんだと思う。

雨を浴びている彼女に声をかけられるなどという奇跡が起こるの
は、

たぶんあの日しかなかったと思うからだ。

僕は、あの日が雨で本当によかったと思う。

あの日、掃除当番でよかった。

じゃんけんに負けてよかった。

7月から2ヶ月くらい滞在していた夏が、やっと重い腰をあげて帰ってゆく9月の上旬。

その日は、台風の近づいた暴風雨だった。

「ごーみだしじゃんけん、じゃんけんぽん」

6つの手が中央に出される。

パーが4つにグーとチョキが1つずつ。

「あーいこで、しょ」

開いてしまった手を見て、僕は内心舌打ちをした。

中央には5つのチョキが僕のパーに向かって光線を浴びせている。

「きーまり！ 皆川君。よろしく」

じゃんけんの調子を取っていた桂が僕に半透明の袋に入ったゴミ袋を手渡した。

僕の両手で抱えられるくらいの大きさ。

誰かが中に牛乳を捨てたのだろう。

雑巾みたいな匂いがする。

「じゃあ、帰っていいよな！？」

「先生に見てもらわないとだめだよ」

すでに整頓し終わった机たちの隙間を縫って、自分の席に向かっ

ていた木村は足を止めた。

「まじ？」

「大マジ」

それに受け答えているのはすべて桂だ。

僕以外の3人の班員はそれを面白そうに見ている。

それらを尻目に、僕は教室の後ろのドアから出て行った。

ゴミだし、とは体育館の裏手にある焼却炉近くのゴミ集め場までゴミ袋をもっていくことだ。

そこで中を引っ掻き回して、分別までしなきゃならないのだから、疎まれて当然の役割だ。

しかも、今日は雨。

子憎たらしいほどの雨音と、騒いでいる風たちが、僕を憂鬱にさせる。

「2年4組いいよー」

新しいゴミ袋を持った生活委員のお姉さんと一緒にゴミを分別して、お墨付きをもらった。

あとは、ゴミの山に放り投げれば完了だ。

ゴミ集め場までは体育館の外玄関から屋根伝いに行ける。

ゴミだし用のつかかけサンダルを履いて、二つに増えたゴミ袋を抱えながらその道を歩いた。

そろそろお役目ごめんとすることも手伝って、屋根にはちばちと当たる雨の音が愉快に聞こえる。

湿っぽい風が吹き付けてくるけれど、冷たくて気持ちいいくらい

だ。

ゴミ集め場にゴミを勢いよく放り投げて、ぱんぱんと手を払った。これをしていないと何だか役目を終えた気にならないから不思議だ。

ぶおーっと風が吹いた。

髪の毛が逆立って、Yシャツの裾から入り込んだ風が僕の体を冷やす。

思わず両手で自分の体を抱いて、立ちすくむとばさつと足元で音が鳴った。

ビニルの袋が僕の足にひっかかってばさばさと音をたてている。

「ん？」

肩掛け用の紐のついたビニルの袋。青と水色でチェック柄の模様が印字してある。

誰かの持ち物のようなそれ。

持ち上げてみると、何かしらの重みがあった。

振ってみると、ぼふぼふと中で何かが暴れた。

失敬、と呟きながら僕はビニルの袋を開けた。

「ジャージか」

赤色のジャージ。白のラインが申し訳なさに顔をのぞかせている。

僕たちの学年のジャージだ。

一緒に体育着も入っている。

「空見？」

体育着に印字してある名前が上を向いて僕を見つめている。
知ってるも何も、空見さんは同じクラスだ。

僕は辺りを見回した。

ここに本人がいなければ、問題だ。

この風に負けないよう懸命に幹にすがっている葉っぱたちが見える。

その向こうには申し訳ばかりにある校庭。

いつもは引いてあるトラックの白線が今は雨で消えていた。

こんな雨の中だ。

外に誰かがいるはずがない。

いじめ、という言葉が頭を横切る。

思わず顔が強張る。

僕は水を弾いているビニルの袋を持つと、きびすを返そうとした。

「ちょ、ちよっと待って」

雨と風の大合奏にも負けない声に、僕は立ち止まった。
知っている声。確かに聞き覚えのある声は、僕の後ろ、校庭の方から。

「空見さん？」

振り返った僕の目に飛び込んできたもの。

彼女はさもそれが当然のような顔で、
髪のもも制服もぐっしより濡らして、
僕にっこりと笑った。

「それ、私のなんだ。よかった。拾ってくれて」

白い靴下に泥が所々跳ねている。

「ありがとう」

全身が雨のようになってしまった彼女の腕を、まだ足りないとも言つように雨が打ちつける。

彼女は、僕に雨になった手を差し出した。

僕と彼女の小雨のような秘密1（後書き）

＊＊後書きはちょっと、という方のために後書きが下あります。

思うところありまして改題致しました。
わかりづらくなって申し訳ないです；
まだ、終わってない作品ばかりなのに、
いろいろなところに手をつ突っ込んでしまい、
ちょっと反省モード。
でも、全部がんばります！！

僕と彼女の小雨のような秘密2

——ありがとう。

彼女の言葉は僕の耳に届いたけれど、僕の腕はそれを持ったまま動かなかった。

地面に落ちるはずだった雨粒たちは、空見さんという予期せぬ障害物にぶつかっては弾けている。

彼女の腕をくりとすべって地面にたどり着く雨粒たちもいる。

「皆川君？」

空見さんが不思議そうに首を傾げた。

それをやるのは僕のほうだ。

なんで。

なんで雨に打たれてるの？

誰かに強制されたの？

風邪ひいちゃうよ？

制服びちょびちょだよ？

ねえ、なんでそんなに楽しそうなの？

いろいろな疑問とか考えとかそういったごちゃごちゃしたものが頭のなかをぐるぐるかき回す。

「濡れてる……」

やっと僕の口から出た言葉はすごく気の抜けるものだった。

それでも空見さんは笑って、嬉しそうに微笑んで、上を見上げた。

「うん。すつごく気持ちいい」

僕は彼女に雨越しに袋を手渡した。

それを受け取った空見さんは、片手でそれを守るように抱えようと、僕に手を振った。

「じゃあね。皆川君」

雨の振る中、傘もささず、まるで雨の中を歩くのが普通であるかのように校庭の方へと歩き出す。

僕は教室へと戻った。

桂だけが残っていて、僕に担任からオッケーをもらって解散したことを告げた。

「皆川君も帰って大丈夫だよ」

そう言った彼女に、うん、と生返事を返す。

僕の教室が校庭に面した側にある。

学校はし字を横にした形で、校舎が校庭を囲っているから、内側にある教室からはすべて校庭が見渡せるのだ。

線のような雨が地面に突き刺さっている。

鉄砲玉のようなそれは当たったらそれなりに痛いだろう。

僕はその銃弾の嵐の奥に目を凝らした。

探しているのは、雨まみれの少女。

理解はできない。けれど、彼女の手は冷たかった。
触れた手が、冷たかったのはわかった。

僕は、雨だからと母親に無理やり持たされたタオルをひつつかむと、教室から駆け出した。

「皆川君!？」

桂の声が聞こえたけれど、そんなの知らない。

玄関口の傘置き場から自分のだと思われる青いビニル傘をひつつかむ。

登校で使っていたスニーカーは朝の雨をしみこませたまま、下駄箱にひっそりと居座っていた。

足に入れると、靴下までもが濡れてくる。

傘を差して、校庭を走った。

雨でぬかるんだ土に面白いように足跡がつく。
顔に雨が吹き付けて、目を開けるのがやっとだった。

スニーカーに水が入った。

きつと靴下はドロドロいっているだろう。

なぜ、そんな衝動に駆られたのか。

僕は、校庭の隅にある、体育倉庫の前に立っていた。

走ったためか、制服の学ランが雨を吸って黒く光っている。
前髪の先に小さな雫がいくつもついているのが見えた。

「だって、あれで空見さんが風邪引いて、明日休んだりしたら、きつとちよつと嫌な感じになるじゃないか」

僕は独り言のように言い訳をすると、よし、と呟いて倉庫のドアを開けた。

校庭から見えたのはこの倉庫に入っていく彼女の後姿。
雨から逃げるようにこの中に入っていた彼女の姿だった。

ドアを開けると、かび臭い匂いが鼻についた。
もあつとしたこもった熱と湿気が僕に襲い掛かる。

空見さんは陸上競技用のマットの上にジャージ姿で座っていた。

どきつとした。

驚いたように振り向いた空見さんは、いつも結んでいる髪をほどこいていた。

つやつやと輝いているその髪はまるで雨の妖精みたいだ、なんて思ってしまった自分が恥ずかしい。

顔にしたたる雨水は彼女の涙のようだった。

すうつと流れ落ちては消える透明な涙だ。

きれいだ、と思った。

ガラスのオブジェを見ると必ず思うように触ったら壊れてしまうんじゃないかと、思った。

それはあながち間違いではなかった。

実際彼女はこのとき壊れてしまいそうで、ずっとずっと壊れ続け

てきていて、そして、あんなに悲しい目をするようになってしまったんだと、今なら思う。

僕が彼女を見て、どきつとした理由は、何も彼女のきれいさに目を奪われただけではない。

彼女の、瞳。

雨の日の空よりも暗くて、深い色の。

焦点の合わないその瞳が、僕に笑いかけてくれた空見さんのものとは思えなかった。

僕はその瞳にこのとき既に囚われていたんだと思う。
決して雨を降らすことのできない、その瞳に。

僕と彼女の小雨のような秘密3

「皆川君……？」

彼女の小さな声が体育倉庫の中で不安定に響いた。

出ては来たもののどこに行けばいいのかわからない。

そんな感じた。彼女の声は。

僕はことさらゆつくりと傘を畳んだ。

脇にタオルを挟んで、傘先を下に向けて、雫を振り払って、ワンタッチ式で閉められるそれを両手で丁寧に閉じた。

そうまでしても、僕は僕の早まった心臓の音を元に戻すことはできなかった。

乱雑に置かれているハードルの傍に立てかける。

薄汚れた備品の中で、青のビニル傘はそこだけライトアップされたかのようだ。

「はい」

僕は少し湿ったタオルを彼女に差し出した。

ここまでにくらか雨を吸ってきたそれは、けれどまだ十分に役目を果たせるはずだ。

水色の毛の逆立ったタオル。

彼女はそれを見て、僕を見て、困ったように笑った。

眉を下げて、口は必死に笑おうとするけれど、目が「なに？」と訴えかけている。

彼女の手は、体育座りの形のまま、動こうとはしない。

僕は無言でそのタオルを広げると、彼女の頭に被せた。

「え？」

彼女の驚いた声も顔もきれいさっぱり知らないフリをして、僕がしがしとタオルの上から彼女の髪を拭く。

「え、ちょっと、皆川君？」

それは僕の奇行を咎めるものでもやめさせるものでもなかった。いきなり晴れ渡った空に、雨やんだのね？と聞いてみるようなものだった。

だから、僕はそれに「うん」と答えた。

それから彼女は何も言わなかった。

ただ、じっと目を閉じて座っていただけだ。

年頃の男を目の前になんて無防備な格好だろう、と眉をしかめてしまっけれど、彼女の長い睫を見られたことは僕にとってはすごくラッキーなことだったろうと思う。

ガシガシと彼女の頭を拭いたのは最初だけで、それから髪の手をタオルに挟んで叩くようにした。

僕の妹がよくそうしているのを思い出したからだ。

女の子の髪の手がデリケートなことも。

髪の手の手は彼女の手。

くすぐったそうに身をよじる彼女の顔を右手で固定して、左手で優しく撫でるように拭いた。

耳も美容院でやってもらうような感じで水分を拭きとる。首を竦めた彼女は色っぽかった。

最後にジャージの濡れた部分を気休めのように拭いた。もちろん、僕の触れられる範囲で。

水色のタオルは彼女の雨を含んで、きれいな空色に色づいていた。

「終わり」

僕がそう言っていると、彼女はうつすらとまぶたを押し上げた。

「ん。ありがとう」

彼女は体育座りをようやく崩してぐっと伸びをすると、僕に笑いかけた。

「すごい気持ちよかった」

そして、少し横にずれるとほとんど隣を叩く。

薄汚れたマットは外用のもので、埃と泥をかぶり続けてお化けにもなったかのようなのだ。

はみ出した綿が痛々しい。

僕は彼女の望むとおりに横に座った。

隣に座ってみると、彼女の小ささが目立つ。

肩の位置は僕の方が5センチほど上にあった。

「誰かに見られたの、初めてなの」

悪戯をみつけたかのようにくすくすと笑う。

今にもぺろりと舌を出しそうだ。

噛み付かないとも限らないから、そうはしないでほしい。

気の利いた返事も見つからなかったので、僕は黙って聞いていた。

「ましてや、ここに乗り込んでくるなんてさ。ほんと、びっくり」

本当にびっくりしてるのかしてないのか、彼女はただ面白そうに笑っただけだ。

肩が揺れるたびに、長い髪の毛も一緒に跳ねる。

まるで、壊れたおもちゃのように。

「帰ろうか？」

気づいたらつい、言ってしまったていた。

髪の毛がぴたりと止まる。

「なんで？」

その時はまだ彼女の声は空の雲のように自由だった。

ただ思っがままに泳ぐ雲のように、「なんで？」と思うからそう聞く。

でも、僕にはそれがすごくアンバランスに見えた。

だって君は答えを知っているんじゃないの？

僕は彼女を見返したけれど、彼女はただただ純粹に僕の口から解答を求めている。

「泣きづらいと思うから」

僕は溜息と共に答えを吐き出した。

彼女の瞳を見たまま、それが彼女の中にどうやって入っていくのか気になって目を離すことはできなかった。

彼女の真っ黒な瞳がゆっくりと暗くなつてゆく。

空に夜の帳が下りるように、彼女の瞳から色が失われる。

でもそれも一瞬のことだった。

僕が間近で彼女の瞳のみを見ていたからこそ、気づいた程度のほんのわずかな変化。

彼女はふいつと下を向くと、僕の腕に手を絡めてきた。

ドキッとしなはずがない。

それでも僕も年頃の男の子だ。

「そうゆう」こと全般に興味がないわけじゃない。

彼女は顔を上げて僕を掬い上げるように見ると、首を傾げた。

その様子を可愛いと思ってしまふのは、きっと仕方なかったと思う。

「皆川君、私の名前知ってる？」

ビニル袋を拾った時に彼女の名前を言ったのは聞こえなかったのだろうか？

僕は今一度彼女の名前を紡ごうとした。

「空……」

「ストップ」

自分の口に指を当てることで、まるで魔法のように僕の口も止まった。

指の肌色と唇の赤のコントラストがすごく艶っぽい、ということ
を僕は初めて知った。

「私の名前は、ソラ。ソラだよ」

彼女の、ソラの瞳が瞬く。

僕はそれを見ながら神妙に頷いた。

「ソラ」

口にのせて言ってみる。

それは、随分と長い間僕が呼んできたかのように、しっくりと馴染んだ。

「なに、みなちゃん？」

笑顔で聞き返すソラに少し面食らう。

「みな、ちゃん？」

僕は自分の指で自分を指差した。

「いや？」

ソラに聞かれて少し考えてみる。

「そうでもない」

「じゃ、みなちゃん」

ソラがなぜ僕にそんなあだ名をつけたのか、僕にはまだよくわからない。

たぶん、とか、恐らく、とか、考えられる範囲で言うとか、なんて言葉を50個くらいつけて、さらに、断じてそうであるとは言えないけれど、僕の自意識過剰だと思うけれど、って言葉を気の済むまで付け加えてから言うのなら、ソラが僕を好きにならないため、だと思う。もつと言ったら、男として見ないため。

女の子みたいな名前をつけて、それで彼女が僕のことを少しでも受け入れられるなら、それでよかった。

僕は、ソラにとっての太陽でありたいわけじゃないんだ。

そう、言うなら昼間の月がいい。

夜じゃなくて昼間の。

うつすらとぼやけた、舞台袖で出番を待つ脇役みたいな。

ただソラという舞台に立てるなら、それで僕はいいと思っていたんだ。

こうして、僕は「空見さん」から「ソラ」に、ソラは「皆川君」から「みなちゃん」に呼び方が変わった。

それが少しくすぐったいだなんてのはソラには秘密だ。

僕と彼女の間にできた秘密が少し嬉しい、だなんてことも。

僕と彼女の水溜りのような距離 1

それからソラが僕のことを「みな」と呼び捨てするまでには少しの時間がかかった。

ソラが僕に笑顔以外のものも見せてくれるようになるまでには、もっともつと時間がかかって、僕がソラを抱きしめるようになるまでにはそれからもうちょっとの時間が必要だった。

一步一步縮めてきて、やっと築いた今のソラの隣を僕はそうやすやすとなくすわけにはいかなかった。そう。僕はもう彼女の隣に立っているもんだとばかり思っていたんだ。

今でも僕は思う。なぜ、もつと早く気づけなかったのか。

ソラの笑顔の下に何があるか、気づけるのは僕だけだったのに。僕はふわふわしたはちみつレモンみたいに甘酸っぱい気持ちに溶けてしまっていたんだ。

有名スポーツショップのロゴの入ったビニルバッグを肩にかけてぬかるんだ泥に足跡をくつつけて、いつの間にか忘れてしまっていたんだ。

あまりにも、あまりにもソラが綺麗に笑うから。
彼女のあの暗く深い瞳の底を。

ソラが学校を休んだのは、僕が誰もがうらやむ一番後ろの席をゲットしたすぐ後のことで、叩けばカラリと鳴りそうな空が晴れた日のことだった。

「あれーソラちゃん休み？」

ソラの前の席の子がくるりと後ろを向いて、主のいない机を見や
った。

まるで声を出したら負け、とても言うようにひっそりと息を飲み
込んでいるみたいだ。

「ほんとだ。珍しいねー」

隣の席の子が相槌をうつ。

僕はそれを一番後ろの席で頬杖をつきながら聞いていた。
まるで関心がないかのようにするのが精一杯で、体の中の熱が一
気に上昇する。

雨に打たれても、ソラは一度として学校を休んだことがない。

ただ、よく保健室に行っていることになっていて、体が弱い
とは思われている。

実際はそんなの爪の垢ほどもない真っ赤な勘違いだ。

ソラの肺は尋常じゃあないほど頑丈にできている。

雨に打たれていない僕ですら、ソラに付き添って鼻をぐずらせた
ことの1つや2つないわけがない。

ソラが気にすると思うから、絶対学校は休まないけど。

「たぶん、それ風邪とかじゃないよ」

ソラのななめ後ろの席になった桂が沈んだ声で言った。

「え？ 桂ちゃん何かしってんの？ デートとか？」

興味津々といった感じで女の子が桂に話しかける。
デート、という言葉にこめかみがずきりとした。

沈んだ顔のまま桂は笑って首をふる。

「そんなんじゃないよ。そうそう、今日英語小テストらしいよ。聞いた？」

小テスト、という悪魔の響きに女の子たちから悲鳴が漏れる。

「うそー。まきちゃん何にも言ってなかったのにー！」

「抜き打ちらしいよー。この間の小テストと一緒に問題らしいけどね」

「なんで桂ちゃん知ってるの!？」

驚きの声上がる中、桂はにんまりと笑って見せた。

「あたしの情報収集能力なめないでよね。昨日、職員室行った時に、まきちゃんの机ちらつと見たら、テスト置いてあったんだー」

すごい、天才、という声が飛び交う中、教科書を引っ張り出し前回のテスト範囲をみな必死で見返し始めた。

僕も多分にもれていない。

小テストも気がかりだけれど、それよりもソラのことを上手く交わしたようにしか僕には思えなかった。

教科書の影からちらりと桂を盗み見る。

桂の一つに束ねられた髪がぴよんとはねた。

楽しそうに笑う桂の動きが止まる。

僕にはその様子が、ソラの机をじっと見つめているようにしか見

えなかった。

「なーんでみんな抜き打ちテストってわかってたのかなー」

まきちゃんがぶつぶつ言いながら小テストを抱えて教室を出て行くところ、僕はダッシュで廊下に出て行った。

「まきちゃん、まきちゃん！」

僕より10センチほど大きいまきちゃんに追いつくと、僕はまきちゃんを見上げて勢いよく言った。

「な、なんだ皆本」

のけぞるまきちゃんに追いつがるようにして、僕は目に力を込めた。

「さっきの小テスト、もう一回見直したいんだ。白紙のでもいいから、使っていない小テストのやつあったらくれない？」

授業中何度も考えた口実を僕は可能な限りに切実な口調で言った。ある意味切実だったので、演技する必要もなかったんだけど。

「え？ ああ、いいぞ。おまえ、やる気になったなー」

はは、と笑いつつ、僕はお礼を言ってきびすを返した。
長居は禁物だ。

まだ計画は半分しか成功していない。

そう、この計画の目的は、ソラのうちへ行くこと。
それには住所を知る必要がある。

「なあかつらー」

僕は何気ない調子で教室へと帰ると小テストをぴらぴらさせながら、桂の席に向かった。

「なに？」

「なんかまきちゃんに、ソラ、みさんの小テスト渡しておけって言われたんだけどさー、そらみさんちって知ってる？　なん俺んちの近くって言われたんだけど」

僕の家の近くなんていうのははったりだ。
使ってる電車が同じだから、劇的に違うと言うことはないだろう。

「あれ、あんたんちって川越の方だったっけ？」

僕は心の中でうっしとガツポーズした。
川越と言えば乗り換えで使う駅だ。

「うん、まあそうだけど、どこらへんなの？」

眉間にしかめ面を作りながら、桂は腕組みをし始めた。
桂が考えるときの癖だ。

「うーんと、確かパルコの先だったかなー。 Pasta やさんがあるんだけど、そこをまがって、3本目の電信柱んとこ。なんならあたし

が行こうか？ ソラの様子も気になるし」

桂の好意は痛いほどわかるが、今は丁重にお断りする。

「いいよ。桂今日委員会だろ？ 俺暇だし。どうせ乗換えで通る道だから」

「そう？ じゃあ明日ソラの様子教えて。あと、ちゃんと食べてるかも」

「食べてるか？」

思わず聞き返した。風邪じゃあないのに食欲が落ちるってこと？

「あの子、一週間くらいはたぶん休むから。何にも手に付かなくなっちゃうし」

こっそりと桂が耳打ちしてくる。

ソラのことをわかつている気になっていただけに少し気持ちが沈む。

何にもわかってなかった。

わかってあげていなかった。

それをソラは望んでいなかったのかもしれないけれど、僕にとっては目を覆いたくなるような失態だったんだ。

ソラが一人で苦しんでいることに、僕が気づいてあげたかったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7164d/>

泣き空は君に微笑む

2010年10月28日08時00分発行